

Dear Welsh Dragon

shigurek49

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

お前は生きろ、イツセー。

完結しました。

評価で指摘をされていたことに気付いたので、短編⇒連載（完結）に変更。

# 目次

Dear Welsh Dragon	1
Dear My Friend	10
Dear My Fellow	27
Dear My……	38
Dear My Partner	51
予告……?	60
憑依曹操が行くHDD	70



## Dear Welsh Dragon

意識がかすんでいく。

力が抜けていく。

俺の内側にいる相棒も、すでに虫の息だ。

人語を介することすらできない木端ドラゴンとは言え、ドラゴンだ。

この毒は俺以上に辛いだろうに、相変わらず意地だけは張るやつだ。

「無事、か、イツセー」

声を出すだけで、もう死力を尽くすという表現が合うんじゃないかと言うほどに、声を出すことさえつらかった。

だが、まだ死ねない。

まだ、死ねないんだ。

俺は、まだ、やり遂げられていないんだ……！！

「当、たり前……だろ、まだ、おっぱい、揉んで、ねえ……だから、な」

隣で俺と同じように倒れ込んでいる赤い鎧。

兵藤一誠。通称イツセー。

俺の親友であり、俺を天才だと呼ぶ人物であり、俺を救ってくれた人物だ。

その彼も、今は俺と同じくサマエルの毒を受けて瀕死の状態だ。

イツセーは赤龍帝。ドラゴンであるなら、この呪いの毒は避けられない。

オーフィスは何とかなりそうか。

なら、俺はイツセーを助けよう。

——いや、こんな俺でも、きつと障壁一枚分くらいは熟してみせる。

「禁、手」

『おい、冬也。何をする気だ！ 今、力を行使すれば死期を早めるだけだぞ！』

「心配、するな、ドライグ………お前、の、つ、宿主、くらいは……ッ、何とかするッ」

俺の神器は『龍の手』。最もポピュラーな神器で、所有者の力を二倍にする効果を持つ。

そう、普通の『龍の手』だ。

亜種だったら、主役を張れたかもしれないが、そんなことはなく、中に封じられていたのもギリギリトカゲではなくドラゴンと呼べるようなヤツだ。

そして、俺も才能があつたわけじゃない。

どこまでも平凡で、チンケで、とてもグレモリー眷属に相応しくない眷属だった。

そもそも俺の駒は、半分に欠けたポーン。

残りの半分はイツセーの中にあるから、イツセーのおこぼれ、オマケもいいところだ。ろくにプロモーションすらできない駒なんていらないだろうに。

よくリアス部長は俺を捨てないでいてくれたものだ。

むしろ駒を摘出して、イツセーに加えてやった方がよかつただろう。

ずっと足を引つ張つてきた。

駒王協定が結ばれた、あの時からずっと。

レーティングゲームの時も、禍の団とやりあつた時も、ずっとみんなにおんぶに抱っこされて生き延びてきた。

アーシアのような能力もないせに戦闘力も決して高くない俺は、グレモリー眷属のウィークポイント。俺を倒す旨味すらないから、囹としての価値すらない。

アザゼル先生からも才能はない。諦めろつて言われるくらいだ。

そんな俺でも、みんなは見捨てなかった。

何よりイツセーは、そんな俺でも、ずっと信じてくれていた。だから、頑張ったこれだ。

だからこそ、俺はきつとこの禁手に至れたんだと思う。

禁手『龍の加護』、選んだものを倍加させる。

こんな俺の禁手は亜種であった。

きつとこの時のためだったに違いない。

よくやったぞ、俺。

だから、最期くらい気合を入れてやり切れ！

「イツセーの治癒力・生命力・抵抗力を倍加」

『そんなものは自分に使え！ 本当に死んでしまうぞ！』  
「俺よりもイツセーだろうが！」

そう、俺なんかよりもイツセーが生き延びないと。

俺が生き残っても邪魔なだけだ。

何の役にも立たない。



でも、イツセーは違う。

イツセーは赤龍帝、みんなの希望だ。

それだけじゃない。

みんなを引つ張っていく旗印だ。寄る辺だ。

だから、こんなところで死んではいけない。

俺の大事な人たちを守ってくれる、俺の何よりも大事な親友。

そんな奴を絶対に死なせてなんてやるものか。

「ドライブ、俺を取り込め」

『な、何を言う』

「俺の身体は、もうだめだ。下半身と左半身の感覚がすでにない」

『っ』

「だから、頼むよ、ドライブ。俺に、もう少し頑張らせてくれ」

俺の身体を捨てれば、中にある駒がおそらくイツセーに吸収される。

そうなれば、少しは状態も和らぐかもしれないし、何より本来の駒八個分のポテンシャルを発揮できるようになる。

さらに取り込まれれば、俺の意識はおそらく神器の中へと向かう。

そこからならば、俺がかけた倍加の力を維持できるだろうし、何よりイツセーの魂を守れるかもしれない。

ドライブグは一瞬悩んだ様子であったが、すぐに俺に対して了承を返してくれた。

「ありがとう、ドライブグ」

『すまん、冬也。俺には大したことはできん』

「何、言つて、んだよ、冬也、ドラ……イグ。冬也、お前……っ！」

「ははは、すまん。イツセー。」

ドライブグ、頼む」

『ああ』

怒ったような声色のイツセーを無視して、俺の意識が一瞬暗転する。

しかし、その次に目が明けると、そこにあったのは、白い空間。

神器の中の世界、イツセーの持つ『赤龍帝の籠手』の中。

イツセーが先輩たちと呼ぶ歴代赤龍帝の残留思念たちが、イツセーを毒から守っていた。

俺は、さらにその前に立って、毒を一身で受け止める。

「ぐおお……ぐ」

痛みを超えた何か。

俺と言う存在が瞬く間に削り取られていく。

だが、耐える。耐えろ。

俺と初めて会った時を覚えているか、イツセー。

俺は覚えている。

イツセー、一人で遊んでいた俺を遊びに誘ってくれたよな。

あれは、本当に嬉しかったんだ。

それからはよく一緒に遊ぶようになって、気が付くと隣にいるのが普通になってた。きつと俺が女の子だったら、お前に俺の全部をささげていたくらいだ。

ありがとう、イツセー。

俺はお前より前にいようとずっと努力を重ねてきた。

そんな俺をお前は天才だって笑ってくれたけど、違うんだ。

俺は必死だったよ。

こんな俺に失望されないように、必死で必死で、ずっと怖かった。

そんな俺をずっと親友だつて言ってくれてたお前は、俺からすれば本当に救いだつたんだ。

イツセーは、俺とは違ってできるやつだ。

お前だからこそ、アーシアを救えたんだ。

お前だからこそ、部長は望まない結婚をせずに己を貫けたんだ。

お前だからこそ、祐斗は復讐の先を見れたんだ。

お前だからこそ、朱乃さんは自分の生まれを受け入れられたんだ。

お前だからこそ、子猫ちゃんは黒歌と仲直りできたんだ。

お前だからこそ、オーフィスも変わったんだ。

お前だからこそ、俺もここまで来れたんだ。

生きる、イツセー。ここは、お前が死ぬ場所じゃない。

お前は腹上死でもしてろ。

そして、言わせてくれ。

「これまでありがとう、イツセー。」

こんなどうしようもない俺を親友だつて言ってくれて。

本当にありがとう」

そして、俺の意識はかき消されるように、深い闇へと消えていった。

# Dear My Friend

「禁、手」

『おい、冬也。何をする気だ！ 今、力を行使すれば死期を早めるだけだぞ！』

「心配、するな、ドライグ……………お前、の、つ、宿主、くらいは…………ツ、何とかするツ」

親友の掠れた声が僅かに耳に届く。

俺の口からは、すでに何も出ない。

意識がだんだんと朧げになっていくのがわかる。

「イツセーの治癒力・生命力・抵抗力を倍加」

『そんなものは自分に使え！ 本当に死んでしまうぞ！』

「俺よりもイツセーだろうが！」

聞いたことがないような、何かを決めた叫び。

ダメだ。やめてくれ……………！

何で、何で、何でお前がそこまで俺のために頑張ってるんだよ……！

「ドライグ、俺を取り込め」

『な、何を言う』

「俺の身体は、もうだめだ。下半身と左半身の感覚がすでない」

『っ』

「だから、頼むよ、ドライグ。俺に、もう少し頑張らせてくれ——」

ここから俺に記憶はない。

次に目が覚めた時には、全て終わってしまっていたのだから——

アイツ——善導冬也ぜんどうとうやと出会ったのは、もう10年も前のことだ。少しばかり記憶は薄れてきてしまっているが、それでも俺は覚えている。

「なあ、お前！　一緒に遊ぼうぜ！」

「へ？」

公園の端っこで暇そうにしていた冬也に声をかけたのが、全ての始まりだった。

イリナの奴に連れまわされていた俺は、俺の味方になってくれそうな——俺と一緒に遊んでくれるような奴が他にも欲しくて、そしてそんな冬也に目を付けた。

当時のアイツは、俺よりも小さくて、細かった。

あとに聞いた話だが、アイツは両親から虐待を受けていたらしい。

「へ、って何だよ」

「いや、俺と、遊んでくれる、の？」

「だから、遊ぼうって言ってるじゃんか」



「名前も知らないのに？」

「おう、そつか！ 俺は兵藤一誠！ みんなイツセーって呼ぶからイツセーって呼んでくれ！」

昔の俺は、こんな俺が言うのもアレだけど、馬鹿だったんだと思う。

けど、冬也のヤツを見つけた時、俺はどうしてもアイツと遊びたくなつた。

今思うと、運命とか、そういうヤツだったのかもしれない。

龍と竜、きつと、そういうヤツだつて。

できれば、運命の糸とかそういう運命は可愛い女の子と結ばれていて欲しいけど、それでもアイツとの出会いだけは、必然だったんだと思う。

「イツセーか。イツセー、うん。」

俺の名前は、善導冬也。好きに呼んでくれ

「おう！ 冬也！ これで知りあいだし、俺とお前は友達だ！

だから、俺と遊ぼうぜ！」

「友達……？ 友達、か……そつか、そうだな！ おう、倒れるほど遊ぼうぜ！」

「ああ！」

そんな出会い。

それから俺とアイツはよく遊んだ。

イリナも一緒の時もあったが、途中でアイツは海外に引っ越してしまい、他に友達もいたけど、一番遊んでいたのは冬也とだった。

何て言うんだろうな……俺とアイツは妙に波長が合った、とでも言うんだらうか？

アイツは俺よりも一つ上だったけど、それでも他の奴らよりも大人びていて、悪く言ううと老けていた。

一時期、酷くボロボロの時があつて、暫くしてからアイツは施設に引き取られた。

あのころはよくわかつてなかったけど、父さんたちの台詞を思い出す限り、冬也の両親が捕まって、アイツが虐待から解放されたのは、その時だったんだと思う。

そうやって、色々あつたはずなのに、アイツはそんな影すら俺には格好ぐらいでしか見せず、気が付くと近所のガキたちの兄貴分的な存在になつていた。

俺も、もちろんその中の一人で、その中でも一際冬也に近い存在だったから、なぜか誇らしかったし、みんなが冬也に惹かれていくことも嬉しかった。

俺からすれば、冬也は本当に兄貴分だった。

あんな兄貴が欲しかった、と父さんたちに言つたくらいだ。

— そうやって過ごしていった、小学校、中学校と年齢は上がっていったも、俺と冬也の關係は変わらなかつた。

俺は……まあ、自分で言うのもアレだけど、周りから変態って言われるような言動をしていただけ、冬也は窘めさえするものの、俺に対する態度は変えなかつた。

後から知つたことではあつたけど、むしろアイツは俺の兄貴分として俺の尻拭いをしてくれていた。

本当に凄いヤツだと思う。

当然モテてた。

俺も羨ましいと思つた。

けど、冬也ならいいかなつて、冬也ならそりやモテるよなつて、思えたから、それは嫉妬にはならなかつた。

純粹に、ずっと冬也に憧れて過ごしてきた。

対等の親友ではあつたけど、たった一年とは言え、人生の先輩で、それに見合つたよな、俺じゃできないことを俺に見せてくれていた。

かつこよかつた。

天才つて言うのは、冬也のためにある言葉だつて本気で信じてた。

勉強も教えてもらつていた。

おかげで駒王学園にも入れたといっても過言じゃない。

事あるごとに冬也は、今俺があるのはイツセーのおかげだって言うけど、それは違う。そもそも、冬也がいなかったら、今の俺もないんだ。

駒王学園に入らなかったのなら、きつとオカ研のみんなには出会わなかっただろうし、何より悪魔にはならなかっただろうし、そしてリアスと、こんな関係にはなれなかった。

冬也の奴は、家から近くて奨学金もいいから、っていう理由で駒王に入り、そして俺はそれを追って駒王学園に入った。

もちろん女子率が高い、とか下心があつたのも確かだけど、やっぱり冬也と違う学校っていうのも何かしつくりこなかったんだ。

俺が入学し、一年が経り、そしてレイナーレとの一件があつて、俺は悪魔としてリアスの眷属となった。

夕麻ちゃんに——レイナーレに殺される時、たまたま通りかかり、俺を庇って俺と一緒に死んでリアスに転生させてもらった冬也。

その時の冬也の駒はポーン。

でも、なぜかポーンの半分だけだったそうだ。

俺を先に転生させようとして、その時に勝手に一つのポーンが真つ二つに割れて、リ

アスが唾然としている間に半分は俺に、残り半分は冬也へと入っていったらしい。

半分でもきつちりかつちり転生させる辺り、流石のアジユカ様だと思う。

けど、その半分だけだった弊害か、冬也は『兵士』の駒で最も重要な能力である『プロモーション』が使えなくなってしまうていた。

そんなわけもあつてか、冬也は他の悪魔たちからは見下されていた。

こればかりは仕方がない、つて冬也は笑っていたけど、俺としてはどうしても許せないことだった。

ライザーとのレーティングゲームの時だつて、確かにリアスの政略結婚が許せなかつたつてのも大きいけど、それと同じくらい冬也のことを「才能のない赤龍帝のさらに才能のない残り滓」と貶したことを訂正させるためだつて言うのも大きかった。

そのライザーとのレーティングゲームでは、冬也は撃破数こそライザー側のシリーズとか言う騎士を倒したただけだったけど、戦術面ではリアスに助言を続けるなど面目躍如だった。

それでも俺たちは力及ばずでライザーには勝てなかつたけど、そこから冬也はグレモリー眷属の軍師つていう立場を築いていった。

実際、グレモリー眷属内ではポーン半分だつていう理由で軽く扱われることもなく、逆に誰にも変えられない必要な存在として重宝されていた。

その……何て言うか熱くなりやすいリアスを窘め、冷静に対戦の局面を見つめて指示を出すっていう他の奴らにはできないことをしていたし。

戦略面で光るものがあるから、という理由でトレードの申込も一応あったらしい。それは、リアスが断つたらしいけど。

しかし、それでも冬也は、戦いではそういった面でしか役に立たない、と自分を責めていることがあった。

冬也は、たまたま俺に巻き込まれて転生したけど、神器持ちの存在だった。

神器は『龍の手』。俺も自分の神器が『赤龍帝の籠手』と判明するまでは、最もポピュラーなものと言われてしよ気もしたけど、冬也と同じだっていうのは嬉しかった。

神器の効果は、所有者の力を二倍にする、というもの。

『赤龍帝の籠手』の低位互換だと侮辱されていることすらあった。

俺と冬也は常に比べられていて、その時は冬也がずっと責められていた。

これまで一緒にいる間では、逆にずっと俺が比較され続けていたのに。

でも、冬也はそれに屈せず、ずっと自分を鍛えていた。

だからこそ、神器もそれに応えて、禁手化に成功していた。それも亜種のだ。

その能力は、馬鹿な俺じゃ説明しづらいものではあるけど、選んだものを二倍化させるというもの。

それも有機物無機物問わず、強制的に二倍化させるもので、よく相手の発動前に何かやつて力を暴走させたりしていた。

頭のいい譲渡能力の使い方とはああいうものを指すのだな、と毎回それを見るたびにドライグすら感心していたほどだ。

けど、そんなアイツの良さがわかるのは、アイツをちゃんと知っている奴だけだ。

俺が強く——グレモリー眷属のみんなが強くなるたびに、アイツはアイツを良く知らない他の連中に貶されていった。

それは敵——『禍の団』も一緒に、曹操たちは冬世のことを『グレモリー眷属のウィークポイント』とまで言いやがった。

まあ、それに関しては、冬世の奴が曹操に一発吠え面かかせてやつて訂正させていたけどな。

ヴァーリの奴も初めは冬世のことを侮っていたけど、何回か行動を共にしている間に冬世のことを知ったからか、ちゃんと認めていたようだ。

何でも、他の連中とは視点が違う、魔力の使い方や戦い方に新しい道を教えてくれた、などと俺のライバル様からは、認めて以来は高評価だったのだから。

確かにおそらく冬世の奴がグレモリー眷属と一人ずつ戦つて勝てるのはアーシアやギヤスパークくらいかもしれない。

いや、実際に戦ったのなら、きつとあの手この手と梃子摺らせてくれること間違いなしだけでも。

それでも、冬也は、俺たちの立派な仲間で、他のみんなができないことができるやつだった。

冬也と付き合ってるんじゃないかと思うくらいに仲が良かったソーナ会長に至っては、ウィークポイントとは真逆で、アジアと同じく生命線だと言ってくれていた。

レーティングゲーム中だと現場指示を出してくれる冬也のいる状態とない状態とでは、戦いやすさの差が大きい。

こう言うアレだけど、やつぱり攻撃一辺倒なグレモリー眷属をうまく扱えるっていうのは、すごかったんだと思う。

アザゼル先生も、才能はないって初めの頃は言ってたけど、途中からは一番相手にしたくないタイプ、あるいは真っ先に潰しておきたいタイプだと言ってたくらいだし。

何があるうと、最後の最後まで足掻いて、自分を貫き通す。

どれだけ相手が強くても、絶対に諦めない。

そして、誰よりも他のみんなのことを考えて動いていた。

そう、そんなヤツ。

今回だって、俺と一緒にになってオフィスを守ろうと、ボロボロになりながらシャル



バの前に立つてくれた。

二人でシャルバの奴を倒したんだ。

けど、けど、何で——

「勝手に逝ってやがるんだよ……っ！」

目が覚めた時、俺の身体だけじゃなく、俺の半身とも言える親友の姿もなかった。

代わりにあったのは、冬也の黒ずんだ「完全に死んでしまっている」『龍の手』だけ。冬也だけでなく、この『龍の手』の中に封じられていた竜も一緒に死んでしまい、も

う何の力も持たないものとなってしまっているらしい。

それから、ドライグから語られていく俺が気絶している間のこと。

冬也の奴が、俺の魂が汚染されないようにその命を懸けたこと。

そして、冬也の最期の言葉。

『これまでありがとう、イツセー』

ありがとうって言いたいの、俺の方だ。

何回感謝すればいいんだ、俺は。

『こんなどうしようもない俺を親友だつて言ってくれて』

これも逆だよ、親友。

こんなどうしようもない、赤龍帝っていう肩書を無くしたら、何も残らないような俺を親友だつて言ってくれて。

『本当にありがとう』

だから、言うのは俺だよ。

だけど……—

「死んじまったら、もう、お前に、ありがとう、つて……言えねえじゃねえか……っ！」

鎧に魂を移されている俺は、涙が出ない。

でも、それでも、ぽっかりと何か欠けてしまった感覚がある。

「まだ、俺は、お前に……何も返せてないだろうが……！」

『相棒』

「イツセー」

今、俺の身体はオフィスとグレートレッドによつて新しく作られているらしい。

そこにこの鎧に宿っている状態の俺を移し直す、とのことだ。

俺はまだ生きている。生きられる。

冬也と先輩たちが繋いでくれた命だ。

「ドライブグ」

『何だ、相棒』

「曹操たちを倒す」

『ああ、このまま二天龍が舐められているのは性に合わん』

「それだけじゃない」

『わかつている。託されたものはあまりにも大きい。』

何より俺もお前の中から、冬也を見て過ごしていたのだ。

これまでなかったほどに俺も全力が出せそうだ』

「頼む、ドライブ」

弔い合戦だなんて言うのと、きつと冬也の奴は怒るだろう。

そんな奴だ。

けど、俺はお前を失って、一瞬また『覇龍』の呪文を口遊みそうになったよ。

意味なんてなくても、つまりはそういうことなんだ。

敵討ちって言い方がダメなら、俺の意地を通して行くためなんだって思ってくれ。

そして、世界に証明してやる。俺を知る全員に思い知らせてやる。

俺の親友は凄い奴なんだって。凄い奴だったんだって。

「行くぞ、ドライブ」

『応。赤龍帝の友の重み、奴らに見せ付けるぞ』

「当然だ——！」

この胸に空いた空虚な喪失感。

きつと埋まることなんて二度とない。

けど、俺は絶対にお前を忘れないよ、冬也。忘れてなんてやらない。

リアスは泣くよ。お前が死んだのを聞いたら。

アーシアも、子猫ちゃんも、木場も、朱乃さんも、ゼノヴィアも、ギヤスパーも、イリナも、ロスヴァイセさんも、アザゼル先生も、レイヴェルも。

ソーナ会長はもちろんだろうし、匙たちもそうだ。

魔王様たちだつて、きつと。

みんな泣くよ。悲しむに決まってる。

お前が死んだなんて、みんなにどう伝えたらいいんだよ。

俺にみんなに伝えさせるだなんて、最期の最期にこれまで迷惑かけてきた仕返しみたいな、どでかいお仕置きを遺していきやがって。

本当に、本当に。

何で死んじゃまったんだよ、あの馬鹿野郎！

お前がいたからこそ、俺はここまで来れた。

だから、俺は生きて、最強の兵士になる。

だから、俺を見ていてくれ——

誰よりも強かった、俺の大事な親友

## Dear My Fellow

彼と初めて会ったのは、駒王学園に入学した直後のことだ。

当時から部長は、駒王学園旧校舎の一室をオカルト研究部としてグレモリー眷属の表向きの看板とすることを決めていた。

なので、僕も入学と同時にオカルト研究部に入部したわけだけでも、駒王学園には剣道部があり、その剣道部の実力も全国大会に度々出場するなど、なかなかなものであるらしく、確かに僕の扱うものは剣道ではなく剣術であつたけれど、対人の経験の足しにはなるかな、と顔を出すつもりでいた。

もちろんこれは入学当初の剣道部部长と話した結果得れたものであるので、何かグレモリーの力を使ったというわけじゃない。

まあ、その剣道部部长は、どうもウチの部長に少し気があつたみたいではあるけれど、それはまた別の話である。

そういうわけで、僕は入学当初にその剣道部に赴こうとしたわけではあつたけれど、この駒王学園は結構な大きさを誇る。

有り体に言えば、道に迷った。

そんな僕の前にふらりと現れて、剣道部まで道案内してくれたのが、彼——善導冬也先輩であつた。

「キミと同じ学年に性欲に正直なとんでもない馬鹿がいるけど、関わる事があつたら、できれば仲良くしてやってくれ」

道案内の途中での会話で、そんなことを言われたことを覚えている。

そのとんでもない馬鹿っていうのが誰かは一か月もしない内にわかつた——まあ、イツセーくんであつたわけだけでも。

そこで縁でも生まれたのか、善導先輩とはときどき顔を合わせ、イツセーくんほどではないにしろ、彼がグレモリー眷属入りする前から他のみんなよりは仲が良かったと思う。

先輩然とした行動を常日頃心掛けているようで、誰にでも親切に対応し、文武両道成績優秀。

そのくせやることはやり遂げる熱血漢的要素も持ち合わせた存在。

女子からも人気はあつたんだと思うけど、僕ら男子生徒の中でも彼は羨望の対象とし



て認められていた。

まあ、実際僕も頼りになる人だ、と信頼していた。

もちろんそれは眷属入りしてからも変わらず、むしろその信頼度は上がっていった。運動神経やらその辺りは一般以上に優れていたけれど、それは人としてであり、悪魔としては一般的な部類の戦闘力しか持っていなかった。

でも、彼がいるグレモリー眷属は、非常に融和が取れた居心地のいいものであった。

その人の持つ価値とは決してそんな単純な力だけじゃなくて、もつと大切な部分で決まる。

この言葉は、聖魔剣に至った契機となったコカビエルやバルパーとの一件の際に、自身力のなさに不甲斐なさを感じていた僕に向かって、彼が言った言葉だ。

その言葉と共に彼は、いつでも待っている、とだけ告げて、僕を諭すわけでも説得するわけでもなく去っていった。

てつきり部長たちと同じように説教からはいるものだと思っていた僕にとっては、逆に痛烈なものであった。

その後、僕はオカルト研究部のみんなと手を合わせて、コカビエルへと立ち向かい、僕は『双覇の聖魔剣』へと覚醒した。

その時の善導先輩は、すでに現場指揮をしてみんなの補助をしていた。

途中で僕らの隙を突かれて、コカビエルに気絶させられてしまった彼であったけれど、その時の彼の指示のあるなしの差がここまでになるのかと実感させられた。彼は僕らをよく見ている。

それは修行の時にも生かされていたし、戦い方を定める良い指標にもなった。さっきの言葉は、貴方にもきつちりと当て嵌まるんですよ、先輩。

貴方は決して邪魔な存在などではありませんでした。僕らの大事な、とても大事な頼りになる仲間でした。

けれど、善導先輩はちようどその頃から、たまに表情に陰が差していることがあった。きつとその頃から何だと思う。

善導先輩が自分の力に劣等感を感じていたのは。

僕らからすれば、先輩の力は確固たるものであったし、それこそただの暴力でしかない力とは比較にならないほど重要で、とても頼りになるものであったけど、それ以上に周囲の——外野の囁きが彼の心に少しずつ溜まっていつていた。

それでも、そんなことがあっただなんて、僕も彼が遺した手紙を見るまでは気付きさえしなかった。

どうして察してあげられなかったのか、今でも悔みますよ、先輩。

特にそれを見て、ショックを受けているみんなを見るとより一層そう思います。

その善導先輩は、イツセーくんと共にオーフィスを助けるためにシャルバの元に残り、そして死んだ。

龍門を使つて、彼らを呼び寄せようとしたけれど、そこに現れたのはポーンの駒八つ。そう、善導先輩が持つていたはずの半分のポーンが、イツセーくんの持つていた残りのもので一つにくつつ付いていた。

それがどれか、というのは一つだけ真ん中に繋ぎ目があるものがあつたので、特定は簡単だった。

みんなそれを見て、悲嘆に染まつた。

僕たちが期待していたのは、駒じやなかつたのだから。

彼ら二人の姿を望んでいたのだから。

そこから僕らは、色々な人に励まされ、一縷の望みを持つてアジユカ様のもとを訪ねる。

この帰つてきた『悪魔の駒』から何か掴めないか調べてもらうためだ。

しかし、みんながみんな、著しく精神的に消耗していた。

彼らを失つた、というのは、あまりにも大きな損失で、損害だ。

こうも、心に何かぽっかりとしたものができてしまったように思えるのだから。

だけど、僕ら以外にも悲しみに暮れていても動こうとしている人物たちもいる。

ソーナ・シトリー会長や匙くんも、涙を流しながらも都市防衛線に一般人の保護のために出向いている。

特にソーナ会長も暫くはリアス部長たちと同じような状況にあったのだから。

それでも、そこから自力で這い上がり、さらに部長を気に掛けることすらしていった会長を知り、加えてサイラオーグさんの叱咤もあって、みんな動ける程度にはどうにか持ち直せた。

アジユカ様のところでは、アジユカ様の勧誘に来ていた英雄派のジークフリートと遭遇する。

他にいた旧魔王派の連中は、アジユカ様によつて葬られ、僕はジークフリートと再び相対することになった。

ジークフリートは、イツセーくんと善導先輩を無駄死にだと嘲り、さらに先輩のことをいってもいなくても変わらなつただろう。それこそイツセーくん以上の無駄、だと罵つた。

ああ……やっぱりそうですよ、先輩。

僕もイツセーくんと同じだったんです。

貴方に憧れていました。

貴方のようにになりたいと思っていました。

イツセーくんの言うように貴方はかつこよかった。  
魅せられていました。

そんな貴方を罵られて、僕はどうしようもないほどの怒りを覚えた。

それは、僕に新たな力を齎してくれた。

別に禁手を超えた何かを会得したとか、そういうものじゃない。

けれど、それは僕にとって何物にも代えがたいような力となってくれるもの。

ライザー・フェニックスとのレーティングゲーム前の修行の際に善導先輩からとある質問を受けた。

それは、僕が創れる魔剣はどんなものかと言うこと。

それに対して僕は、できることを素直に答えなければ、そこで先輩から僕には思いもよらなかつた答えが返ってきた。

僕は魔剣を創る際、例えば「光を消すことが出来る魔剣」をイメージする。

そして生まれる魔剣の能力は光を消す、というものになるわけだけれども、その分本物の聖剣や魔剣と比べると脆い、という弱点がある。

だから、僕はその硬さと切れ味を上げようとしていた。

けれど、彼はその発想を逆にした。

まず硬くて鋭い剣を目指し、そこに能力を持たせていけばいい。

万全で、最も基礎に相応しい最強のニュートラルを作り上げてから、派生させていけばどうだろうか、と。

目から鱗、とはまさにこのこと。

それにこの思想から作り上げていけば、戦闘中に能力の切り替えすら可能になるかもしれない。

ゆえに僕は、いつもの修行に加えて、先輩の言ったものを目指した。

それが成功しようがしまいが、きつとこれは無駄にならないものだ と確信が持てたから。

折れない魔剣を創りだそう。

曲がらない魔剣を創りだそう。

刃毀れせず、他の聖剣や魔剣を切り裂けるだけの切れ味を持った魔剣を創りだそう。

ニュートラルなものも創るにしても、なるほど。確かにこれだけの機能があれば、それは紛うことなき魔剣の類だ。

そして、今、その魔剣が完成した。

折れず、曲がらず、刃毀れせず、万物を斬断する、能力を持った魔剣。

「僕らを導け——！」

そして、僕はジークフリートの龍腕の内、二本を断ち切ることに成功する。

だが、代わりに僕も左腕を切り落とされ、出血の余り戦うことすら困難な身となってしまう。

だけど、それでどうして諦める理由となるのだろうか。

まだ僕には動く身体がある。剣が振れる右腕がある。

折れない剣を求めたのは、なぜだ。

それは相手の攻撃を弾き、みんなを守る騎士けんしとなるためだ。

だが、すでにうまく剣すら創りだせない。

そんな僕の目の前に現れたのは、イツセーくんと先輩の駒が組み合わさったもので、

その駒はイツセーくんの持つていたアスカロンと化す。

握る。暖かい波動を感じる。

これはイツセーくんや先輩から感じていたものだ。

イツセーくんと約束だけじゃない。

先輩の声も聞こえる。

——きつと真つ先に死ぬのは俺だ。

——けど、それで何かを守れたなら、俺は本望だと思つて死ぬに違いない。

——俺の死は、無駄死にと呼ばれるものとなつているかもしれない。

——だが、それで守られたものがあつて、その守つたヤツが何かを為してくれば、それはきつとすごいことだと言えるんじゃないか？

——だから、俺は決して立ち止まらない。

——イツセーと祐斗がとある約束をしているのは知つているけど、だからこそ俺はお前たちを守りたい。

——無責任な言葉かもしれないけど、頑張れよ。

——頼りない先輩からの、お願いだ。

「……無茶を言う人だ」

奮い立て。

あの魔剣使いを黙らせろ。

騎士とは命だけを守る存在なのか？

それは否だろう、木場祐斗。

託された誇りと希望を守らず、何が騎士か。



この『ポーン兵士』の駒を皮切りにグレモリー眷属のみんなは戦意と意思を取り戻し、最終的にはグラムが僕を新たな主としたことで戦況は一変、ジークフリートを打ち倒すことに成功した。

だけど、このあとのアジユカ様による『悪魔の駒』の解析による結果は、一つの希望と一つの絶望を僕らに知らせるのであった。

善導冬也、サマエルの血による影響と戦闘による傷により死亡。

それが彼が持っていた半分の『兵士』の駒に残された最期の記録であった。

Dear My……

奴のことか？

アイツは不思議な奴だ。

力は弱い。それこそ俺にとつては歯牙にかける必要性がないくらいに弱い。

まあ、これには少なくとも武力——しいて言うならば、暴力に関しては、というのが奴と関わってからわかったことだが。

奴の役割は、場の状況把握と問題への打開策を見出すこと。

その視点の多彩さで、味方の手数を増やし、勝利への道筋に奴の周囲の連中を導くことだ。

学んだのだろう。才能こそ感じられないが、様々な分野や種類の魔術への造詣は非常に深い。

これで奴にそれを扱い切る才能があれば、とも思うが、それは仕方がないことか。

第一、奴は龍の軍師。ふ、まさかアルビオンすら思い付かなかったような力の使い方

を考え出すとは。

奴と語り合うのは非常にいい。

おかげで、俺とアルビオンの目指す『真なる白龍神皇』の完成形の目処が立った。

その点と、ここまで兵藤一誠を導いてきてくれたことには感謝している。

それに加えて、あの曹操に一泡吹かせた男。

そして、そこで曹操に突き付けた台詞。あれは、いいものであった。

「良いことを教えてやるよ、テロリスト。お前たちは英雄でもなんでもない。

英雄とはな、人から褒め称えられて成るものだ。決して戦場の華となる強さを持った存在じゃない。少なくとも、イツセーとは違って、チビツ子に泣かれるお前らは英雄じゃない！」

痛快、と言うべきか。

あの時の英雄派どもの顔は見物だった。

奴——善導冬也の死亡。これは大きな損失だ。

悲しむほど友好を深めていたわけではないが、惜しい存在を亡くしたものだ。

我らがライバルの心が折れていないことを祈るばかりだ。

まあ、奴があれだけ気に掛けて、ここまで導いたのだ。

この程度で立ち止まってしまふような奴ではないだろう。

そうだろうか？ 赤龍帝——兵藤一誠？

善導冬也、のこと、ねえ？

一言で言うなら、天才に憧れて足掻いている凡才ってところか。

ヤツは、基本的にはどこまで行っても一流にはなれない、せいぜいが二流止まりにしかなれないような素養の持ち主だった。

本人も自覚はあったのか、悪魔としてだけでなく、人間としても器用貧乏な奴だった。神器も『龍の手』、中身なんて俺が片手間でも数千回と殺せるような木端ドラゴン。どう頑張っても倍加するだけが限界みたいな神器。

隣にいた『赤龍帝』兵藤一誠と比べたら、気に掛ける必要性すら感じない存在だ。

だが、ヤツはそんな中でも存在を確固たるものにしていた。確かに戦えば、勝てるだろう。

墮天使の総督である俺にかかれば、一瞬で済むような戦闘能力だ。

しかし、ヤツが敵対勢力にいるとなれば、別だ。厄介なこと極まりない。

厭らしい手を使って、あの手この手と搦め手で戦力を削って来やがる。

そういうヤツだ。

しかし、人格面ではそんな色なんて見せず、どこまでも愚直で誠実な奴だった。ああ、確かにアイツは良い奴だ。

んなもん、アイツと関わってきた時間が長い期間じやなかった俺ですらわかる。加えて、アイツの思考は独特だ。

俺の神器研究には程よい刺激となってくれた。

もちろん俺も感謝してるさ。

そんな善導のヤツが遺していきやがったんだ。

アイツがあのお世で悔むようなことにはしねえ。させねえ。

俺の全力をアイツが遺したかった大事な連中に注いでやる。

逆にその場になぜ自分がいなかったのか、後悔させてやる。

覚えていろよ、善導。

俺も、お前のことは覚えておくからよ。

奴——善導冬也か。

確かに名立たる眷属の溢れ返るグレモリー眷属の中では目立たい存在だろう。

だが、奴ほど厄介なグレモリー眷属もいない。

『僧侶』アーシア・アルジエントと同じくグレモリー眷属の生命線。

故にリアスとのレーティングゲームでは、全力でその力を削ぎにかかった。

しかし、俺たちの考え出した戦術は全て読み切られ、個々の力で一部圧倒したこともあつて互いに眷属を削り合う試合にはなつたものの、視点を変えれば、あれは我々の完敗であろう。

そう、リアスと善導冬也に。

それに奴は、俺の一撃に耐え切つてみせた。

確かにダメージは大きく、動けなくなるほどではあつた。

しかし、レーティングゲームから敗退にならない程度に意識を留め、サポートに徹した。

奴は、端から頭だけで戦うつもりなどなかつたのだ。

自分ができることを必死に考え出し、どうすれば有効な一手を生めるかを考え出した結果、ああいう立場に至つただけ。

兵藤一誠に並ぶほどの奴は、どこまでも熱い奴であつた。

そんな奴をグレモリー眷属は——赤龍帝は失つた。

今の眷属に不満はない。

だが、俺もあんな奴が仲間になくなつたかと聞かれれば、それは嘘だ。

まあ、数ヶ月前にリアスにトレードを申し出た際には断られてしまったわけだが。

可能性の一部を千切られてしまったグレモリー眷属、少し不安に思うところもあるが、奴があれだけ全てを懸けたのだ。

再起し、さらに上を目指してもらわねば、奴がその全てを懸けた意味がない。

乗り越えろとは言わない。

それを抱えたまま、前へ進め。

「そっか。支取の夢は学校を作ることか。うん、俺に出来ることなんか知れてるとは思うけど、何かできそうなことがあったら教えてくれ。俺にもそのすごい夢、手伝わせてくれないか？」

私、支取蒼那ことソーナ・シトリーが彼、善導冬也と初めて出会ったのは、駒王学園の入学前オリエンテーションのこと。

元より学園サイドの——悪魔側の存在である私にとってはあまり必要のないもので

したが、せっかく学生の身分としてこの人間界にいるのですから、学生として義務付けられたものには参加するべきでしょう。

加えて、眷属に加えたくなるような人物にも出会えるかもしれません。

そう思い、参加したそのオリエンテーション。

今思うと、本当に参加していてよかったと思えるものでした。

別段早く行こうだとか思っていたわけではないのですが、往來の性格かオリエンテーションの開始時間よりかなり早めに駒王学園へと辿り着きました。

これに関しては、私の『女王』である椿姫にも少し苦言を訂されてしまいました。まあ、私ですのて諦めてもらいましょう。

学園に着き、暇を持って余した私たち。

会場で待っていてもよかったです。どうにも作業をしている方々の中に多く悪魔の方々がいるようで、頻りに私たちに気を使ったような反応や視線を向けてきて、それに少し疲れた私は椿姫を連れて、学内を見て周ることにしました。

すでに下見を済ませていたので特に迷うこともありませんでしたが、順に主要な場所を周っているところで、一人私たちと同じように学園を見て周っている男子生徒に出会いました。

その男子生徒こそが善導くんでした。



目的も同じだったので、その後は一緒に学内を見ていくことになり、その間の会話でおそらく友人とは言えるような関係になっていたように思います。

彼は非常に気さくで気が利き、あまり初対面の人には笑顔を見せない椿姫ですら彼には微笑み返していて、その時間は非常に楽しいものでしたね。

時間がやってきてオリエンテーションが行われる会場に戻り、その時も彼は私たちのすぐ近くに座り、進行をしている方には少し悪い気もしましたが、時折会話を交わしながらそのオリエンテーションを過ごしました。

オリエンテーション開始時間にやってきたせいで、私たちとは離れた席に座っていたリアスと姫島さんには、後々に見知らぬ男性と私がしゃべっていたことに驚いた、と告げられました。そこまで私も硬くありませんよ、まったく。

オリエンテーション終了後は少し善導くんと喋っただけですぐに別れましたが、その後はすぐにまた顔を合わせることになりました。

と言っても、同じクラスだったというだけなのですが。

一応学園側からの配慮なのか、王と女王の組み合わせでクラスが分けられたようで、リアスたちとは別のクラスでしたが、椿姫とは同じクラス。

そして、善導くんと同じクラスでした。

まあ、結局彼とは三年間ずっと同じクラスに配属されたのですけど。

加えて出席番号も近かったこともあって、よく席の並びが私、椿姫、善導くんというものであることも珍しいことではありませんでしたね。

友人関係となつてから一番驚いたことは、どこで知り合ったのか、お姉様と善導くんが非常に仲の良い様子であったことなのですが。

と言いますか、「セラ」と「とおくん」と渾名で呼び合っている姿は少し妬きもしたくらいです。

それからも彼との交友関係は続き、こう言うのも少し含むところもあるのですが、おそらく眷属を除けば、最も仲の良かった近しい存在と言えるでしょう。

何度か恋仲かと勘ぐられたこともありました、別に彼とはそういう関係というわけではありませんでしたし。

まあ、好意を抱いていなかっただけではないので、何かキツカケがあれば、そうなっていた未来もあったかもしれませんね……。

善導くんはお姉様からの印象もいいものでしたし、その能力も戦闘能力こそあまり持たないものの、それを補い切れるほどの戦術眼。

椿姫も何かに付けて焚き付けようとしてきていましたし、つまりはそういうことなのでしよう。

しかし、それはもう、永遠と来ない不可能な未来になつてしまいました。

善導くんは、我々悪魔でも驚くくらいに色々とできる方です。

しかし、仲良くなって初めてわかったことではありましたけど、それ以上に彼は努力家でした。

本人曰く、ほとんど才能がないけど、才能がないなりに足掻いている、と。

天才ではなかったたのでしょけれど、努力する秀才であつた彼は、確かな結果を残していききました。

それこそがきつと彼にしかできなかつたことだと私は思います。

彼は、どこか人を惹きつける何かを持っていました。

男性陣に対しては、憧れを抱かせるような何かを。

女性陣に対しては、それこそ私自身どうしてかはわからないのですが、非常に心配したくなる、母性本能なのかは不明ですけど、そういったところを摸られるような、惹きつける何かを。

アレも一種のカリスマなんでしょうね。

彼の能力が認められ、『王』となっていたら、さぞや素晴らしい眷属陣になっていたのではないでしょうか。

加えて彼は、私をチェスで打ち負かす数少ない人物でしたし、レーティングゲームでの頭の回り様。

私のライバルになり得たのではないか、と想っていた——のに。  
善導冬也。生死不明。

この報が知らされたとき、周りから見た私はどのような様子に見えたのでしょうか。報を聞き、それがどういふことか頭で理解したところで視界が真っ暗になったことは確かだ、椿姫や匙くんから励まされるまでは、ずっと今いる場所がボンヤリと現実ではないような気分には陥っていません。

しかし、私はただ泣いているだけではいられなかった。

いえ、泣いているだけでなんていたくはありませんでした。

生きているにしても、本当に死んでしまっているにしても、あの善導くんがここにいない、そして誰かしらに指示も出していないということは、私達の力とやりようでの場は収められるということ。

そして、何より善導くんが死んでしまっているとしても、私は彼に夢の達成を応援させているし、手伝ってもらいもしました。

だからこそ、私達はこの冥界の危機を乗り越えねばなりません。

私だけだったなら、こんな考えには至らなかつた。

椿姫や匙くん、他の眷属たちにリアスたち……そして善導くん、お姉さま。

これまで私と関わってきた人たちと、今励ましてくれたみんながいなければ、ここま

でこれなかったでしょうし、立ち直れなかったでしょう。

その私を変えた——前に進ませてくれた内の一人であるお姉さまは、涙を堪えながら冥界を危機に陥れる超獣鬼たちの討伐に出ました。

聞いた話では、私以上に善導くんと交友関係の長かったお姉さま。

四大魔王という立場であろうとも、精神は一悪魔に違いありません。

お姉さまも頑張っておられるのに、その妹がただただ後方で守られているわけにはいきません。

「行きましょう」

こちらを心配そうに眺める椿姫や匙くんを横に、私はとある人物に連絡を入れます。彼ならば、リアスたちを呼び覚ませるでしょう。

私には向かない作業で、それを押し付けてしまう形となりますが、そこは男の甲斐性ということ。

ええ。決して乗り越えたわけではありません。

生きているという確かな希望があるわけでもありません。

そして、なぜか彼とは二度と会うことはないという確信を持ってしまっていた私は、不謹慎なのかもしれません。

けれど、今だけは貴方の言葉を頼りに動かさせてください、善導くん。

「未来を見て動いてる支取はかっこいいよ」

貴方は格好良くないつもりだったのかもしれませんが、私にとってはイツセーくんや他のみんなのために動く貴方も凄く格好良かったですよ。

では、頑張ってくださいね、善導くん。

## Dear My Partner

消えて、零れて、なくなっていく。

一欠片も残さずに、そのすべてを犯され、踏み躪られ、あとは周囲にその記録と記憶と言う痕跡を残すだけ。

これが消滅。

正しく終わり、そのものにもはや意味はない。

意味があるとしたら。それは後付されるもの。

ゆえに、終わりは、終わりの向こう側を迎える。

「我、お前には興味ない。でも、お前に我、恩がある」

何もない世界で、声なき声が響き渡る。

聞こえている／聞こえていない。

誰の声だったか／これは誰かの声なのか。  
声って何だ……わからない。

「無と無限は限りなく近い。我、無からお前を掬い上げる。  
そこからは夢幻を超えて、お前、向こう側へ行く」

何だろうか、わからない。

けど、知っている——気がする。

「俺」って言うのは何だろう。

でも、叫んでる。

言っておけ、と。

言わなければ、俺足りえないぞ、と。

「もうすぐイツセー、目を覚ます。だから、お別れ」

もう「俺」にはそんな力はない。

すでに身体はないし、魂もないに等しい。



ないに等しい、俺に相応しい終わり。

でも、そこに次を用意してくれたのなら、言うべきことは一つ。

そして、俺として言っておくべきこともあと一つ。

「ありがとう。イツセーを頼んだ」

「ん。任された。寝るといい、■■■■」

吹き消えるように最後の一欠片は消滅し、無が生まれる。

無は無限と夢幻に近い。

ゆえに龍神は力を行使し、残滓を痕跡として向こう側へと送り付ける。

彼はそうするに値する。

龍神はそう判断したがゆえに己が力を行使する。

あとは向こう側で自力で補え。

ここまでが彼らが領分、それ以上は彼らにとつてはもはやどうでもいいことで、どうしようもないことだ。

ゆえにここから起きる物語は在って無いもの。

アンコールとまでは行かない舞台終わりの、ちよつとした小話に過ぎない——一場の

幻のような夢。

一人で少年が遊んでいる。

その日はいつも一緒に遊んでいる少女が用事で遊べず、他の遊び相手を探したものの誰も捕まえることができず、結果として少年はただ一人公園で遊んでいた。

しかし、その程度でめげる少年ではない。

遊ぶ友達がいらないのなら、遊べる友達を今から作ればいいのだ。

この公園は広い。

探せば、暇そうなヤツや少年が混ざっても大丈夫そんな集まりくらいあるだろう。

そう思い至った少年は公園内を駆けずり回る。

そして、少年は出会った。

それを見た瞬間になぜか話しかけられないと、という衝動が胸の奥底から溢れた。

公園の端にあるブランコで、独りでそれを揺らしている少女がいた。

少女の容姿は大変見目麗しく、髪は銀で日本人らしくない相貌だ。

だが、その表情は今にも不安に押し潰されてしまいそうなほど、どこか悲痛なものであった。

——話しかけないと。話しかけて——何だろう。

少年は、そこまで考えて、思考が停止する。

——どうしても話しかけないといけない気がする。

——でも、それはどうしてだろう？

——話しかけて、その後いったいどうするんだ……？

駆け出したくなる衝動の中、少年は考え込み、そして気付く。

——何だ、考えるほどじゃなかった。

少年がなぜここにいたのか、そこまで思い出せば、あとは行動するだけだ。

「なあ、お前！——一緒に遊ぼうぜ！」

言葉を考えるまでもなく、まるでそう言うことが当然であったかのように少年の口からは言葉が出てきていた。

この言葉に対する答えも、なぜか「すでに知っている気がする」。

少年の問いかけに少女は、驚愕とでも表現するべき驚きに満ち溢れた様子で固まる。

その後、まるで信じられないと言った言葉を顔に貼り付けて、震える小さな唇から紡ぐ。

「へ?」

「へって何だよ」

問いかけに対する言葉は声にならないものであった。

少女の声、それが耳に届いた瞬間、少年の心に浮かんできたのは、とてつもない安心感だった。

聞いたことのない綺麗な声だ。

でも、そこじゃない。

もつと根源的な何か、そこに在るということが凄く嬉しくて仕方がなかった。

「いや、私と、遊んでくれる、の？」

「だから、遊ぼうって言ってるじゃんか」

「名前も知らないのに？」

そして、この時が来た。

なぜだろうか、この時を生まれたその瞬間から待ち侘びていたような気がする。

——会えてうれしい—— “また” 巡り合えたよ。

だから、少年は気合を入れて、宣言するかのようにその口から言葉を紡ぐ。

紡ぐ言葉なんて考えるまでもない。

「おう、そっか！ 俺は兵藤一誠！ みんなイツセーって呼ぶからイツセーって呼んでくれ！」

返しを待つ。

きつと彼……女は答えてくれるはずだ。

少女は言葉を紡いで、その声を返す前に胸の奥に押し込んでいたものが溢れて涙が込

み上げる。

少年——イツセーがこの程度で怒るはずがない。

確信すらあつた。

でも、早く返したい。

だから、と涙を堪えて、できる限りの答えを返す。

「イツセーね。イツセー、うん」

少年の名前を舌の上で転がす。

まるで恋人の名前を呟くようだ。

そんな想いの形ではなかったけど、きつと今ではそれに近いのかもしれない。

そして、少女も意を決して言葉を紡ぐ。

本名ではないが、きつと許されるだろう。

「私の名前は、トーカ・ゼンドー。好きに呼んでね」

ここに再び邂逅は果たされた。

「おう！ トーカ！ これで知り合いだし、俺とお前は友達だ！

だから、俺と遊ぼうぜ！」

「友達……？ 友達ね……ふふ、そうね！ 倒れちゃうまで遊びましょう！」

「ああ！」

こうして、巡り巡って新たな物語が紡がれていく。

この後がバッドとなるかハッピーとなるか、どう転ぶかは、彼の龍神でもわかりはしない。

けれど、それは野暮なことだろう。

きつと、次は——

予告………？

「やあ、お久しぶりと言うべきか、赤龍帝兵藤一誠。

さて、キミの全力は、俺の全力に耐えられるのか、試させてもらおうかア——！！」  
「ハツハツハツ、宿敵である赤龍帝と聖槍の使い手の二人を同時に味わえるなんて、素晴らしいじゃないか!!」

「ぐっ………勝手にやってろよ、この戦闘狂どもめ………っ！」

「トーカー、俺は………！」

「構わない。構わないの、イツセー。

別に無理に喋ろうとせずとも私は気にしないわ。

好きに………貴方の信ずるままに行いなさい。それがきつと貴方の真実よ」



「やあやあ、悪魔諸君。初めまして、今代の聖槍の所持者、『禍の団』英雄派の曹操だ」

「聖槍、だと……!?!」

「その通り。全力で振っても折れないという素敵武器だ」

『——はあ?』

『はあ……』

「今度こそ私が勝たせてもらおうか、曹操オ！」

「はっ、そう言うなら俺に一発でも届かせてみる、ヴァーリ！ その白銀の鎧が見せ掛け

だけじゃないことを示してみろ!!」

「なあ……何とか言ってくれよ、トーカ！」

「トーカ、貴女いったい何者なの？ そろそろ正体を明かしてもらおうよ……!」

「へえ、すいぶん怖い顔ね、リアス。正体と言っても単純な話——」  
『なっ』

「そう……ただ私も悪魔で、本来の姓はゼンドーではなく、ルシファーと言うだけよ」  
「るし、ふぁー……？」

「そうなのよ、ごめんねイツセー。つまり、今は……敵よ」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「何で、何でお前たちが俺たちを庇うんだよ、ゲオルグ、ジークフリート！」

「さて、な」

「キミたちグレモリー眷属は子供たちの希望だ。だから、かな？」

「俺たちの理想にお前が近かった。ならば、守るのも当然だ」

「ははは、そうなる僕たちは『英雄』兵藤一誠のために散った者、となるわけか。それもそれであり、なのかな」

「まあ、あとは曹操もやってくれるさ。だから、あとは任せたぞ、兵藤一誠、木場祐斗」

「ゲオルグ、逝くのか」

「すまん、曹操。約束、守れそうにない」

「やりたかったようにやったんだろ？ なら、俺は咎めないさ」

「ああ、だから、お前に全部託すよ、親友」

「ありがたく、全部託されるよ、親友」

「……そう、来たのねイツセー」

「トーカ、もう諦めてくれ……！ 俺は、トーカとは……！」

「トーカ、我……」

「オフィスもそつちが側、か。まったく——ここまで思い通りになるなんて、怖いくらいだわ」

「さあて、我も参戦しようか、オフィス」

「お前、なぜ、ここにいる」

「なに、普段はあそこが落ち着くのだが、面白い催しがあるらしくてな？ それに当代の二天龍はなかなか中々に面白い。我も参加してみたくなつたのだよ、この闘争に」

「シャルバにはすでに退場してもらつたわ。つまり貴方たちの相手は私たちよ」

「———そうか。とんだラスボスが来やがったな、この野郎。」

まあ、いい。お前らを倒して、トーカは連れ帰る。それから説教だ」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「姉さん、何で姉さんはあんな奴なんかの言うことを……!」

「さて、ね。ただ、お祖父さまは私のことをイツセーの次くらいによく知ってくれている、というだけのことよ、ヴァーリ」

「———ッ、アルビオン!」

『Vanishing Dragon Balance Breaker!!』

「来なさい。ヴァーリ……それでいいのよ」

「さて、なら、俺の全力の一撃を受けてみる、呂布。これが俺の仲間たちを屠ってくれたお前への、俺なりのお返しだ——！」

「ば、ばかな……！ そんなことがあるわけがア！」

「覇輝——」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「イツセー……優しく、ね？」

「……そんな勘違いしちまうようなこと言うな。ホントに勘違いしちまうだろ」

「イ、イツセーなら、構わないわ。元からこの人生全てをイツセーのために使う気だったのだから」

「トーカー……」

「貴方はとても『悪魔』らしかった。貴方には期待していたのですが、やはり貴方は『悪魔』に相応しくない」

「ぐ……」

「せめてもの手向けです。貴方の愛しの兵藤一誠と同じ、この赤龍帝の鎧でとどめを刺してあげましょう」

「——いいえ、どうやら私はまだ死んではいけないみたいなの。だから、貴方にはこの……『龍の籠手』の試し台になってもらうわ」

「『龍の手』ではなく『龍の籠手』ですって……? 何ですかっ、その黒ずんだ『龍の手』

は——」

「そう……これはね、俺の大事な人たち」からの贈り物だ」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「これはお前の筋書きか、リゼヴィム？」

「ウチの孫、なかなか面白いことやってたろオ？ だから、俺ツチもそれに乗ってたろオと思つてなあ？ 途中からライターが変わつてたつてわけ」

「ま、いいさ。超越者であるリゼヴィムと戦えるなら、そんな些細なことはどつちでもい  
「きゃー」

「さつすが曹操クン、シンプルでいいねえ。でも、俺ツチに神器は——おつと」

「なあに、素の力で圧倒すればいいんだろ？ なら、簡単だ。」

それに、俺の全力が攻撃できる相手なんて、そういない。だから、思いっきりやらせ

てもらおう!!」

「ああら、これは不味いのを起こしたか」

「それでは、最終決戦と行こうか」

「いつかの再戦だ。さあ、全力の世界最強決定戦と洒落込もうじゃないか」

「お前らが大人しくしてなかったら、トーカも安心できないだろ。俺がお前らぶちのめしてやるよ」

「はっはっはっ、夢幻の力、今一度貴様らに示してやろう」



世界を命運を懸けた戦いが今、始まる……！

——  
のか？

## 憑依曹操が行くHDD

気が付くと、俺は別の誰かとして生を受けていた。

別に死んだ記憶なんてものはないし、それらしい切っ掛けも思い当たらない。

かと言って、今生に生まれる直前は何をしていたのかと問われると答えられない辺り、この微妙な空白に秘密がありそうだ。

そんなことを考えながらも月日は過ぎていく。

どうやら、俺の名前は、何と曹操というらしく、ここがどこかはわからないが、少なくとも日本ではない場所に住んでいる。

というか、人里離れた場所なせいであまり他の人を見かけないが、一応テレビが一台家にあるので三国志時代に生まれた、というわけではないようだ。

親の名前もこの地域では埋没してしまうような、何でもなし普通の名前だが、俺は曹操らしい。

幼心どころか普通に疑問なので何度か聞いてみても、その度に俺が曹操だからという

理由だと言われた。まるで意味がわからん。

さて、そんな俺だが、物心付き始めた頃——に相当する3歳を迎えた辺りから、両親から武術を学ぶこととなった。

何でも俺の両親はほどほどに有名な使い手らしく、二人の力を持って、俺こと曹操を真の英雄にしてみせると意気込んでいる様子だ。

俺は半ば強制的に戦う術を学ばされ始めたわけだが、最近は自分の意志で両親から鞭撻を頂き、日々腕を磨いている。

確かに初めの頃は嫌々であったが、この身体のスベックが異常なようで、教えられた技術はすぐに身に付く。加えて、そうやって自分のものにしていく過程が気持ちいいくらいに楽しい。

今日はどんなことを教えてくれるのだろう。明日は何をさせてくれるのだろう、と最近毎日が非常に充実している。

しかし、この身体は、本当にびっくりするほどのハイスベックだな。俺には勿体無いくらいだ。

そんな生活を続け、早十数年。

悲しきかな俺は、あつという間に人間の範疇を超えてしまっていた。

種族的には、まだ——たぶん「まだ」人間である、はず……。生まれからもうすぐ二十年。

大人の仲間入りも目前としている俺が、今何をしているかと言えば——

「いいぞ。ああ、いいぞ曹操！ まだ私のライバルとやらには出会えていないが、ここまですでに心躍る好敵手に出会えるとはなあ！」

「俺も、キミとの出会いは嬉しい限りだ、ヴァーリツ！」

数日前、何度目かわからないが、俺を訪ねてきた白いドラゴンと戦っていた。

否、わりと本気で、心から——心の底から楽しんで、全力で殺し合っていた。

まあ、白いドラゴンと言っても、ドラゴン本体ではなく、その魂を宿した『セイクリッド・ギア神器』を宿した、人間と悪魔のハーフなのだ。

そんな些細なことはない。全くもってどうでもいい。

俺にとって大事なのは、コイツは俺が全力を出せる相手なのか、ということくらいだ。

そう、何とこの世界、ドラゴンとか悪魔とか神話の神とか、非常に倒し甲斐のある人が非常にたくさん生活しているらしいのだ。

生活しているといっても、そこはやはり人間社会を脅かさないように、人間には見つ

からないように配慮してくれているらしいのだが。

逆に言えば、暗い裏社会なんかでは、そういう連中が平然とした顔で我が物顔で牛耳ってやがるわけだ。

そうになると、パワーバランスにおいて人間は間違いない下位の存在だ。

だが、人間も全てがそこに収まっているわけではない。

その鍵となるのが、先ほど言った『神器』というわけだ。

神話や昔話に登場する英雄たちは、この『神器』やその他聖剣などの聖遺物を持っていたからこそ、敵や悪である怪物たちを打倒できていた、という。

まあ、この話も俺は聞いただけで、大して興味もないんだがな。

強いやつっていうところには興味津々だけど。

ヴァーリーの背中のできた翼が一際光を放つ。

「アルビオン！」

『Divide!』

「ぐっ……結構持っていられるなあ、それは！」

そして、目の前のヴァーリと言う俺より少し下くらいの“少女”が持つ『神器』の名

は『白龍皇の光翼』。その『神器』の中でも神を殺すことができるほど強力であるとされる『神滅具』と呼ばれるものの一つだ。

しかも、その力に振り回されることなく、己が我によってその力を掌中に置いている。相手にとって不足はなし。

ゆえに俺も使おうか、俺の『神滅具』を――

「では、御開帳と行こうかア――！」

使っていた一応業物の槍を投げ捨て、ヴァーリに叩き付けるようにソイツを出現させる。

それは黄金の槍。

聖人を穿ち、神をその座から叩き落とす人外殺しの頂点。

最強の『神滅具』。

その名を『黄昏の聖槍』。

真正正銘の、世界の覇者のみが持つことを許された究極の一つである。

「そうでなければなアツ！」

だが、阻まれる。

目の前の少女は、腕を交差させ、エネルギーで作られた翼をその前に挟むことで俺の一撃を食い止めた。

この一撃はまともに決まれば神すら崩れ落ちるというのに。  
本当によくやる。

本当に——ドラゴンってというのは、どいつもこいつも俺を楽しませてくれる……!!

「ならば、私ももう一段階上でお前を制そう！ アルビオンツ、『禁手』！」

『Vanishing Dragoon Balance Breaker!』

ヴァーリの身体が純白の鎧に包まれていく。

ああ、期待が膨らむ。胸が躍る。

これこそが『神器』の覚醒の一つ『禁手』。

『神器』が持ち主の感情の高ぶりなどによって影響され、一段階上どころか完全に一つ壁を跨いだ先の力を得る現象、というか、まあ、そういった類のもの。

一般的な雑魚『神器』では、いくら『禁手』しても似たようなものにしかならず、大

して期待もできないものにしかならないが、相手は『神滅具』。

それも、伝説の二天龍の一体『白龍皇バニシング・ドラゴン』を宿した魔王の血筋が辿り着いた『禁手』。

胸が、心が、この餓えてやまない俺の魂が、躍らないわけがない。

「これならば、お前とも打ち合えるだろう？　なあア——曹操ッ！」

激突。

ヤツの放った拳と俺の振るう聖槍がぶつかり合う。

手に返ってくる衝撃が、俺は今、生きているのだと実感させてくれる。

今、この瞬間をどこまでも人らしく、命を散らしているのだとわからせてくれる。

打ち合う。ぶつけ合う。高め合う。

いつから俺は、こんなにも戦闘狂となってしまうのだろうか。

まあ、今となつてはどうでもいいことではないが、この時間だけは至福だ。至高だ。

こんな、わけのわからない世界に生まれ落ちた意味があるッ!!

「うおおおおおっ！」



「ツ——ぐ、一気に行かせてもらおうぞ！」

『Half Dimension』

周囲の全てがびつたり半分、ごっそりとヴァーリに持っていかれた。持つていかれたものは、全て糧としてヴァーリの力と変換される。

戦い始めた時は、相手の弱体化を狙うなどと、と若干思うところがあつたが、あれは違う。

そんなちやちなものではなかった。

あれは、貪欲に力を求めるソレだ。

ありとあらゆるものを飲み込んで、果てしない頂きを目指す覇者のソレだ。

遥か高みに座す何かを下から地の底に墜としてやる、という全てを打倒したいと希う戦闘者の野望そのものだ。

いくら聖槍の加護があるとはいえ、流石に禁手化したヴァーリの相手は、このままでは不利か。

いや、無理なわけではないが、ここはある程度手札を切っておいたほうが得策か。

何より、このままで力を出し続けるのなら、どうしても今の「アレ」ではない本来のものを使いたくなってしまう。

それはいけない。今はまだ時じゃないのだ。

そう言い聞かせ、俺もさらにギアを一つ上へと上げてやる。

「ここまで行かせたのは、キミで5人目だよ、ヴァーリ！ 『禁手』!!」

そして、聖槍が光と共に弾け飛ぶ。

それはハーフとはいえ、悪魔であるヴァーリにダメージを与える類のもので、あまりの勢いに俺と打ち合っていたにも関わらず、ヴァーリは数十メートル吹き飛ばされた。

むしろ消し飛ばなかったのは流石だよ。凡百の連中はこれだけで呆気なく消し飛んだのに。

『トゥルー・ロンギヌス・ゲッターデメルング真冥白夜の聖槍』』

これぞ『黄昏の聖槍』の本来辿り着くべき通常の『禁手』。

聖槍は輝かしい光を纏い、それは俺の身体をも包み込む。

「これで俺に半減能力は無効となった——ッ！」

「私が全力で殴り掛かる分には何の関係もないッ！」

俺に翼はない。ゆえに空は飛べない。

しかし、相手は悪魔であるために悪魔の翼を持ち、加えてヤツの『白龍皇の光翼』はその名の通りエネルギーでできた翼だ。

空が飛べないわけがなく、今も俺を高めから見下ろしながら、地に立つ俺にその強大な一撃を打ちに来る。

それを禁手による聖なるオーラを纏わせた聖槍で迎撃する。

オーラは穂先に比重を置いて集まり、槍自体を柄に見立てた大剣のようになる。

「——ぬッ」

ヴァーリが吹き飛ぶ。

相手は二天龍を宿した神滅具。しかし、こちらは最強の神滅具だ。

二天龍そのものではないのだ。力負けはしない。

押し負けたヴァーリは、翼を大きく広げ、砕けた鎧のヘルムの隙間から喜色に染まった瞳と勝利に餓えた笑みを浮かべた表情を覗かせた。

ああ、そうでないとな。

「なあ、アルビオン。コイツになら使うに値するだろう」

『使うつもりか？ まだお前でも完全に制御化には置いていないだろう』

「構わないさ。だが、歴代連中の残滓も私と同じく戦いに、勝利に餓えた連中だ。そして、相手は伝説の聖槍。嫌でも力を寄越すさ——だから、使うぞ『覇龍』を。」

我、目覚めるは——」

さあて、ここからが本番だ。

コイツ相手なら、確かに俺ももう一段上の力を使う必要性が——

『はあい、そこまでじゃん』

だが、そこで高ぶった気分の中では非常に耳障りに聞こえる、スピーカーからのノイズの入った女の声が水を差す。

……本当に、イイところだったのに。

忌々しい。ああ、本当に忌々しい。

しかし、それは今しがた禁手のさらなるもう一つ上を使用しようとしていたヴァーリも同じようで、何とも言えない煮え切らない表情で顔を顰めていた。

「まったく、曹操……お前とは星の巡りでも悪いのか？」

「俺もキミとなら楽しめるところだったんだがな……」

「なあに言ってるにやん。これ以上は周りがもたないにや」

「むしろ俺ツチと黒歌の二人で仙術の結界張って、それを曹操——てめえが連れてきた英雄派の小勢が全力で強化してんに軽々しく結界を壊ませる——どころかアレは破損か……はあ、こちとらが頑張ってるもんを余波だけでぶっ壊すてめえらがどうかしてんぜ」

俺とヴァーリの戦いの邪魔をした下手人である美候と黒歌がやってくる。

まあ、邪魔と言ってもこれ以上組織の施設を壊してしまうのだから、やむなしか。

この二人は俺の所属する組織『禍の団』では、いわゆるヴァーリ派と言われるヴァーリと行動を共にしている連中である。

どいつもこいつも癖と我が強く、全員を相手にするのは俺でも面倒な連中だ。

なお、黒歌は猫耳に猫尻尾の黒髪和服美人である。そして、美候は締まっているんだかそうでないんだかわからない顔の、彼の斉天大聖の末裔だ。

さて、俺とコイツらの関係であるが、ヴァーリの言った通り腐れ縁一步手前の、なかなか勝負をつける機会に恵まれない間柄である。

恋愛感情などはなく、ただただお互いに相手の全力を叩き潰したいという戦闘意欲の付き合いだ。

俺もヴァーリも、戦闘中に精神を高揚させると共に力も随時開放してギアを上げていくタイプ。このギアチェンジの過程で時間切れとなるのが、もはやテンプレ化してきている。

おそらくヴァーリの切り札はさっき言っていた『覇龍』だろう。アレはドラゴンとしての力を解き放つものだ。俺の聖槍と違って打ち合えるに違いない。

どうやれば、ドラゴン相手に全力を振るえる機会が得られるだろうか。

「まあた面倒なこと考えてるだろ、曹操」

「さて、何のことやら」

俺に怒りを向けさせるのは特効薬だろうが、それは一度限りしか使えない手だろうし

なあ。

はあ……。

「すまんが、萎えた。今日はお暇させてもらおう」

「ちよつと待て、曹——」

さて、じゃあ、あとはオフィスのところにも行くか。  
どうせ次元の隙間に連れ込まれるんだろうけど。

「フ。また振られたな、ヴァーリ」

「ああ、全く。こうもすげなくされては、余韻で打ち震えることすらできないな。」

「は、ははははは……ああ、しかし、心躍る闘争だった。身体中がアイツを求めてやまない」

「いや、それもどうかと思うにや」